付録 3：協働ギャザリング 2015（年度末報告会）

―「プロジェクト・マネジメント」と「協働ガバナンス」の評価

（個別案件）

【付録 3:「プロジェクト・マネジメント」の評価と「協働ガバナンス」の評価（個別案件）】
協働ギャザリング 2015（年度末報告会）における指摘事項

【表付録 3-1:協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく
「プロジェクト・マネジメント」（事業）／「協働ガバナンス」（協働）の有効性（プラス評価点）】
※[]内は採択された協働取組事例

			プラス評価点
[1]あおぞら財団	事業	効率性	● 国＆地方行政ではできないフットワークの軽さをうまく活かしている。[1]
		効果／目標達成度	● 全国資料館連携フォーラムは地域協働の糸口になった。[1]
		計画妥当性	● 資料館関係者だけでなく、社会教育施設、研究者など多様なステークホルダーを巻き込んだ。[1]
		関係主体の巻込度	● 資料館関係者だけでなく、社会教育施設、研究者など多様なステークホルダーを巻き込んだ。[1] ● 原因企業の参加を促すことがができた。[1]
		関係主体の満足度	● 原因企業との対話ができた。[1] ● 全国フォーラムは地域の協働の糸口になった。[1]
		社会的インパクト	● 全国資料館連携フォーラムは地域協働の糸口になった。[1] ● 原因企業との対話ができた。[1] ● 本事業を受けて富山・地元で新たな団体が生まれた。[1]
		自立発展性	● 本事業を受けて富山・地元で新たな団体が生まれた。[1]
	協働	開始時の状況	● 公害における被害者と加害企業との軋轢の歴史。[1] ● 公害資料館どうし、関係者間のコミュニケーション不足。[1]
		運営制度の設計	● 地域と全国の両方からのアプローチを行った。[1] ● 資料館の関係者だけでなく、博物館、研究者など多様なステークホルダーを巻き込んだ。[1]
		協働のプロセス	● 全国フォーラムは地域の協働の糸口になった。[1] ● 原因企業との対話ができた。[1] ● ヒアリングで相互理解、情報共有、信頼関係を創る手法を採用した。[1]
[2]ラムサールセンター	事業	効率性	● ユースボランティアが活動を継続している。[2]
		効果／目標達成度	● ユースボランティアが活動を継続している。[2] ● ユースの会が次の時代へつながりそうでいい。[2] ● 全国（環境省）事業を通して関係市町村会議で市町村を巻込めた。[2]
		計画妥当性	● 滋賀県において産業の視点でプログラムをくみこめた。[2]
		関係主体の巻込度	● 全国（環境省）事業を通して関係市町村会議で市町村を巻込めた。[2] ● 滋賀県の教育委員会が後援になってくれた。[2] ● 教育委員会が初めて関わってくれた。[2] ● ユースボランティアが活動を継続している。[2]
		関係主体の満足度	● ユースボランティアが活動を継続している。[2]
		社会的インパクト	● 新たな NGO が発足した。[2] ● 全国（環境省）事業を通して関係市町村会議で市町村を巻込めた。[2]
		自立発展性	● ユースボランティアが活動を継続している。[2]
	協働	開始時の状況	●
		運営制度の設計	● ラムサール登録湿地関係市町村会議で市町村を巻き込めた。[2] ● 地方環境事務所のコミットメントを促した。[2] ● ユースボランティアの巻き込み。[2] ● ラムサール登録湿地にある NPO、自然観察センターの巻き込み。[2]
		協働のプロセス	● ラムサール登録湿地において異なる特徴を有するプロジェクト・サイトをモデルとした、協働による環境教育プログラムの開発と運営・実施。[2] ● 取組の普及に向けて新たなステップと役割の移行をしている。[2] ● ラムサール登録湿地において KODOMO ラムサール・プログラムや CEPA 活動を実施、参加した活動記録表の作成。[2] ● 環境教育実践手法の共有と地域的文脈に合わせた適合化。[2]
[3]炭鉱の記	事業	効率性	● これまでの協働で培ってきたノウハウを生かしている。[3] ● ジオパークの枠組を活かし、学校教育に近づきやすくなった。[3]
		効果／目標達成度	● 次世代をターゲットにしていて、継続の可能性がある。[3] ● ジオパークの枠組を活かし、学校教育に近づきやすくなった。[3]
		計画妥当性	● 現場の状況を見て、協働プロセスを変えた。伐採「作業」の協働からのスタートではなく、地域に「問題提起」をしながら進めていくことに変えたこと。[3] ● 協働事業を通して長期的な計画づくりができたこと。[3]

憶推進事業団		関係主体の巻込度	● 地域の方々の顔が見える取組をしている。[3] ● ジオパークの枠組を活かし、学校教育に近づきやすくなった。[3]
		関係主体の満足度	● 町内会の積極的な関わりがある。[3] ● 地域の方々の顔が見える取組をしている。[3]
		社会的インパクト	● 「炭鉱の記憶」というキャッチコピーがよい。[3] ● 炭鉱遺産の観光活用を推進している空知管内の他のエリアにも広げていく。(九州にもネットワークがある)[3] ● 立ち入れない場所→協働で活用する場に変化したのはよい。[3] ● これまで地域と関わりの少ない地権者を交えていこうとする動きが地域から生まれている。[3] ● 暗中模索の中、公害という「負」を伝えるために動いていること。[3]
		自立発展性	● 次世代をターゲットにしていて、継続の可能性がある。[3]
	協働	開始時の状況	● ジオパークの枠組みを活かし、学校教育に近づきやすくなった。[3] ● 現場の状況を見て、協働プロセスを変えた。伐採「作業」の協働からのスタートではなく、地域に「問題提起」をしながら進めていくことに変えたこと。[3] ● 負の遺産をプラスに転じる姿勢が興味深い。[3]
		運営制度の設計	● これまで地域と関わりの少ない地権者を交えていこうとする動きが地域から生まれている。[3]
		協働のプロセス	● 地域の将来(20 年後)を考え、目標づくり。[3] ● ビジョン共有を絵、図面で行っている。[3] ● 協働事業を通して長期的な計画づくりができたこと。[3] ● EPO 北海道が課題を明確にしている。[3]
[4]北海道国際交流センター	事業	効率性	● 女性、留学生の効果的・継続的な活用。[4]
		効果／目標達成度	● レシピづくりをとおして利害関係をつなぎ女性も巻き込む機会とした点、食は強い！ワイズユース・観光にもつながる。[4] ● ステークホルダーの心変わりで行政の対応もしやすくなった。[4]
		計画妥当性	● 目線を変えたことで新しいステークホルダーの巻き込みができた。[4]
		関係主体の巻込度	● 女性、留学生の効果的・継続的な活用。[4] ● レシピづくりをとおして利害関係をつなぎ女性も巻き込む機会とした点、食は強い！ワイズユース・観光にもつながる。[4] ● レシピ(楽しい・具体的)を通して利害関係者をつないだ。[4] ● ステークホルダーの心変わりで行政の対応もしやすくなった。[4]
		関係主体の満足度	● 民(採択団体)からの視点でファシリテーター的役割を果たしたことで、意見を大きく覆されることが減ったのではないか。[4] ● レシピづくりが新しい切り口になった、女性の活躍が良い。[4] ● レシピ(楽しい・具体的)を通して利害関係者をつないだ。[4] ● 共生を学ぶという考え方がよい。[5]
		社会的インパクト	● 環境課題を負ではなくプラスの視点で発信している。[4] ● 行政の計画に影響与えた。[4]
		自立発展性	●
	協働	開始時の状況	● 多様な利害関係の存在。[4] ● 町の積極的な参画。[4]
		運営制度の設計	● 外部から様々な人を呼んできて、ステークホルダーとコミュニケーションをすすめたこと。その積み重ねがステークホルダーからのいいインプットにつながっている。[4] ● 外部の意見をうまく利用する。[4] ● 新しい利害関係を突破できたのは外部からの力によるコーディネートのたまもの。[4]
		協働のプロセス	● 利害関係を脱し、ひとつにする目標設定が良い。[4] ● 正攻法から少し切り口をズラして(女性や留学生を巻き込むことによる地場産食べ物を活かした食プログラムの開発)アプローチした。[4]
[5]白神山地財団	事業	効率性	● 8000 年の文化を生かす。[5]
		効果／目標達成度	● 団体が「ならでは」の役割を果たしている。[5] ● 世界遺産も資産として地域に教えることで ESD につながる。[5]
		計画妥当性	● ESD プログラム作成は地域・こどもへのアプローチとしてとても良い。[5] ● 共生を学ぶという考え方がよい。[5] ● 8000 年の文化を生かす。[5]
		関係主体の巻込度	●
		関係主体の満足度	● 5 つの自治体の説得は苦労を要した。[5] ● 教育プログラムからユネスコスクールの設立につなげたこと。[5]

		社会的インパクト	● 教育プログラムからユネスコスクールの設立につなげたこと。[5] ● 世界遺産を資源にした ESD プログラムの完成度が高そう。[5] ● 白神山地の地域資源をフィールドとした教育プログラム。[5] ● 世界遺産も資産として地域に教えることで ESD につながる。[5]
		自立発展性	●
	協働	開始時の状況	● 利害関係の存在、関係団体の統一感の違いを把握している。[5]
		運営制度の設計	● 団体が「ならでは」の役割を機能させている。[5]
		協働のプロセス	
[6]若狭高浜観光協会	事業	効率性	● 楽しめる風景を売りにできる。[6] ● 「ブルーフラッグのために」という意識が着実に浸透している。[6]
		効果／目標達成度	● 海遊びを通して資源化で来ている。[6] ● すでに行政の方針に組み込まれている。[6] ● 観光協会がビジネス性を考えて動いて行政がフォローできている。[6]
		計画妥当性	● 多様な主体の想いを同方向にむけるための象徴化はわかりやすい。[6] ● 適当な共通目標を見つけ選択できたところ。（継続的に協働を求める仕掛けが盛り込まれている）。[6]
		関係主体の巻込度	● 漁業者との歩み寄りのアプローチに取組む（一緒に禁漁）。[6] ● 海外からのツーリストが来る可能性に対する言語対応。[6] ● 観光協会がビジネス性を考えて動いて行政がフォローできている。[6]
		関係主体の満足度	● 違うステークホルダーが互助の関係になっている。[6] ● 浜のにぎわいを創出した。[6]
		社会的インパクト	● ブルーフラッグは知名度を上げている。[6] ● マスコミに取上げられた。ブランド力高まる。知名度上げる。[6] ● 「ブルーフラッグのために」という意識が着実に浸透している。[6] ● すでに行政の方針に組み込まれている。[6] ● 浜のにぎわいを創出した。[6]
		自立発展性	● ブルーフラッグの更新があることで協働の長期目標がつくられる。[6]
	協働	開始時の状況	● 地元行政が高い意識とリーダーシップを持っている。[6]
		運営制度の設計	● 海へのリスペクトがある顧客を集めるための運営制度設計。[6]
		協働のプロセス	● 明確なビジョンのおかげで、関係者の心がひとつになれる。[6] ● 多様な主体の想いを同方向にむけるための象徴化はわかりやすい。[6] ● 観光協会がビジネス性を考えて動いて行政がフォローできている。[6] ● 適当な共通目標を見つけ選択できたところ。（継続的に協働を求める仕掛けが盛り込まれている）。[6]
[7]中部リサイクル運動市民の会	事業	効率性	●
		効果／目標達成度	● ビジネス側の取組として貴重。[7]
		計画妥当性	● 名古屋市の計画モデルとして INPUT を働きかけるというのはよい。[7] ● お酒を買って飲むという手段でそして楽しい形でリサイクル、リユースに参加できる窓口を提供している点が良い。[7]
		関係主体の巻込度	● 使う人、飲む人がしっかり見えている。[7] ● ターゲットがしっかり見えている。[7]
		関係主体の満足度	●
		社会的インパクト	● 地産地消の商品開発による（めぐる）リユースの仕組み開発。[7] ● 食品リサイクルも含めた地域資源循環の仕組み開発。[7] ● お酒なので話題性がある。多少は主体にアピール。[7]
		自立発展性	● 名古屋市の計画モデルとしてインプットを働きかけている。[7]
	協働	開始時の状況	●
		運営制度の設計	●
		協働のプロセス	●
[8]保津川プロジェクト	事業	効率性	● 川を利用した地域の再発見、地域の良さを見直す。[8]
		効果／目標達成度	● 流域協働のモデルになりうる。[8] ● 亀岡市とのプロジェクトの役割分担・バランスが良い。[8] ● 自治体と NPO が協働で事務局という体制がいい。[8] ● NPO と市が協働で事務局を運営できた。[8] ● 行政と NPO が長所で連携し、短所で補い合っている。[8]
		計画妥当性	● 流域協働のモデルになりうる。[8]
		関係主体の巻込度	● すそ野を広げるアプリを活用している。[8] ● 地域の人に「これではいかん！」と思わせたところがマップのすごいところ。市民参加につながる。[8] ● 亀岡市とのプロジェクトの役割分担・バランスが良い。[8]

			● 自治体と NPO が協働で事務局という体制がいい。[8] ● NPO と市が協働で事務局を運営できた。[8] ● 行政と NPO が長所で連携し、短所で補い合っている。[8]
		関係主体の満足度	● 川を利用した地域の再発見、地域の良さを見直す。[8]
		社会的インパクト	● NPO と市が協働で事務局を運営できた。[8]
		自立発展性	● （私も流域連携に関わっていますが）まずは亀岡市という足元をしっかりかためているのはよい。[8]
	協働	開始時の状況	●
		運営制度の設計	● （私も流域連携に関わっていますが）まずは亀岡市という足元をしっかりかためているのはよい。[8] ● 亀岡市とのプロジェクトの役割分担・バランスが良い。[8] ● 自治体と NPO が協働で事務局という体制がいい。[8] ● NPO と市が協働で事務局を運営できた。[8] ● 行政と NPO が長所で連携し、短所で補い合っている。[8]
		協働のプロセス	●
[9] みずしま財団	事業	効率性	● 企業と財団をつなぐキーパーソンの存在。[9] ● 環境⇔経済の両立していることが「水島スタイル」というイメージにつなげている。[9]
		効果／目標達成度	● 地縁組織の巻き込みを行っている。[9] ● 水島おかみのような町内会を巻き込むなど、町と一緒に盛り上げた。[9]
		計画妥当性	● いいとこさがし（今あるよい所を大事にしている）。[9] ● 環境⇔経済の両立していることが「水島スタイル」というイメージにつなげている。[9]
		関係主体の巻込度	● 地縁組織の巻き込みを行っている。[9] ● 水島おかみのような町内会を巻き込むなど、町と一緒に盛り上げた。[9]
		関係主体の満足度	● リスク社会への倫理規範の好事例という意味で大学教育に対してメリットがある。留学生も活用できる。[9] ● 水島と ESD がつながってよかった。[9] ● 10 年間の活動に基づく関係を生かして、新しい協働体制を築いている（大企業も）。[9]
		社会的インパクト	● 大学改革の一環としての地域へのアプローチを活用し、カリキュラムと連携させた。[9] ● 環境⇔経済の両立していることが「水島スタイル」というイメージにつなげている。[9]
		自立発展性	● 企業からの寄付が（見込みだが）期待できる協働の経済的サポート。[9] ● 留学生に学んでもらって国に持って帰ってもらうという形は良い。[9]
	協働	開始時の状況	● 10 年間の活動に基づく関係を生かして、新しい協働体制を築いている（大企業も）。[9]
		運営制度の設計	● 産・学・官の協働体制の構築。[9] ● 大学と NPO のそれぞれがうまく補完し、相乗効果で動いている。[9]
		協働のプロセス	● ブックレット作成を通してビジョンを共有した。[9]
[10] 瀬戸内里海振興会	事業	効率性	● アートの島で話題をつくったこと。[10]
		効果／目標達成度	● アンケート短冊はいい！　アート×海＝活性化。[10] ● 地域主導の環境保全としての自然再生の夢。[10]
		計画妥当性	● アートの島で話題をつくったこと。[10] ● 多くのアイデア出しがある。やれることを落とし込んでいき、実行者を見つけてくれば OK。[10]
		関係主体の巻込度	●
		関係主体の満足度	● アンケート短冊はいい！　アート×海＝活性化。[10]
		社会的インパクト	● アート×海＝活性化。[10] ● 地域主導の環境保全としての自然再生の夢。[10]
		自立発展性	●
	協働	開始時の状況	● 協働の基本は人対人だという事を改めて思い起こされました。[10]
		運営制度の設計	● 離島での小さなフィールドでの取組は有効。[10]
		協働のプロセス	●
[11] うど	事業	効率性	● 「うどんを食べる」という方法で循環型社会づくりに参加できる、という構想が良い。参加店の順調な増加を期待する。[11]
		効果／目標達成度	● 名前（プロジェクト名）もわかりやすくて循環もできていてすごい。[11] ● 「定量化した目標」は課題を明確にする為に素晴らしい。[11]

んまるごと循環		計画妥当性	● 「うどんを食べる」という方法で循環型社会づくりに参加できる、という構想が良い。参加店の順調な増加を期待する。[11]
		関係主体の巻込度	● お商売人さんを巻き込む協働の今後に期待したい。[11] ● 食べることと環境をつなぐことは大事。[11]
		関係主体の満足度	● 食べることと環境をつなぐことは大事。[11]
		社会的インパクト	● 地域性のある実践運営が環境教育にも活用されている。[11]
		自立発展性	
	協働	開始時の状況	●
		運営制度の設計	●
		協働のプロセス	● 協働の進展にともなって新しい課題が明確になった。[11]
[12]土佐の森・救援隊	事業	効率性	● FIT をよく活用している。[12] ● 運搬費が削れた(ているのは)のはよい。[12]
		効果／目標達成度	● しっかりお金としてつくれているのがいい。[12] ● 「お金になる」しくみがとてもいい。[12] ● 就業拡大という共通目標の下で、ステークホルダーをつなぐ役割を NPO が果たしていること。[12] ● 四国 EPO 四国の支援の立ち位置(市民の目標を生かして「素人の代表」として)が分かりやすく、環境学習、ESD の普及のために非常に重要な示唆を含んでいる。[12]
		計画妥当性	● 就業拡大という共通目標の下で、ステークホルダーをつなぐ役割を NPO が果たしていること。[12]
		関係主体の巻込度	● 国有林もフィールドに入られるようなステークホルダーの巻き込み。[12] ● 自伐を広げる考え方、80 人の研究生がいるところ。[12]
		関係主体の満足度	● 自伐を広げる考え方、80 人の研究生がいるところ。[12]
		社会的インパクト	● 就業拡大という共通目標の下で、ステークホルダーをつなぐ役割を NPO が果たしていること。[12] ● 労働力もお金も地域で回るところがすごくいい。[12] ● 取組が「雇用創出」まで行き着いている点が素晴らしい。[12] ● 森林協定書を交わす(企業の森の活用)。[12]
		自立発展性	● イベント的でない。経済が循環するしくみづくり[12] ● 定期的に一定のお金になることによる企業参加の可能性[12]
	協働	開始時の状況	●
		運営制度の設計	● 就業の拡大という共通目標の下で、ステークホルダーをつなぐ役割を NPO が果たしていること。[12] ● 林業関連機関以外を協働メンバーに位置づけたこと。[12]
		協働のプロセス	● 四国 EPO 四国の支援の立ち位置(市民の目標を生かして「素人の代表」として)が分かりやすく、環境学習、ESD の普及のために非常に重要な示唆を含んでいる。[12]
[13]グリーンシティ福岡	事業	効率性	● 各県ごとに運営メンバーがいる。[13]
		効果／目標達成度	● 県の生物多様性基本計画への反映。[13]
		計画妥当性	● 生命地域(山系)に基づく協働モデル。[13]
		関係主体の巻込度	● 通信紙の発行(行政内で回覧可、人の目に触れる)。[13] ● 広域ステークホルダーをつなぐため、通信紙、HP, FB などを活用。[13]
		関係主体の満足度	● ノベルティがいいです。利用者の元気がある。[13] ● ガイドのコーディネート課金(手数料)。[13] ● 踏破証制度のワッペンのデザインが良い。利用促進につながる。[13]
		社会的インパクト	● 県の生物多様性基本計画への反映。[13] ● 政策、計画における必要性を明確にした。[13]
		自立発展性	● 利用者の視点を管理者も持つようにする。[13] ● 地道だけど、確実に出来る PR を実施している。[13]
	協働	開始時の状況	●
		運営制度の設計	● 各県ごとに運営メンバーがいる。[13] ● 直接集う場を設定する。[13] ● 会議進行の工夫、ファシリテーションを意識する。[13]
		協働のプロセス	● 歩道の整備を全体の課題として位置づけた。[13] ● 地方事務所からの文書を発出した。[13] ● 各県担当者同士の交流や学びを促す。[13] ● NPO(民)、行政(官)の役割分担が明確(民:利用促進、情報発信×官:整備、管理)。[13]

			● 行政が相談できる存在として信頼関係を構築した。[13]
[14]小浜温泉エネルギー	事業	効率性	● 温泉資源を町づくりに活用（温泉×ツーリズム、温泉×木材利用、温泉×排熱利用）。[14] ● 全国（環境省）事業がもたらす自治体連携。[14]
		効果／目標達成度	●
		計画妥当性	● 「エネ自給」という視点すばらしい。是非このフロントランナーになってほしい→観光の目玉にもよい。[14] ● 再生可能エネルギー事業が観光まちづくりに組込まれている。全国波及してほしい。[14]
		関係主体の巻込度	● 類似事例との知見の交流をしている。[14] ● 種別をこえたネットワークをしている。[14]
		関係主体の満足度	●
		社会的インパクト	● 木材利用は期待できる。[14] ● 全国（環境省）事業がもたらす自治体連携。[14]
		自立発展性	● 地域の声をまとめて行政が動きやすい状態を作った。市の計画にもり込む事で活動の継続性を担保している。[14] ● 大学をはじめとする関係主体と役割分担しながら経験知を科学的に分析している（木材利用については森林組合、LED 点灯については発電事業者）。[14]
	協働	開始時の状況	●
		運営制度の設計	● 全国（環境省）事業がもたらす自治体連携。[14] ● ステークホルダーの増加を受けて分科会を設計して、結果的に参加は団体 30 まで増える。[14] ● 自治体との協働事務局。[14] ● フラットな場づくり。[14] ● 事業化を検討する場を用意した。[14]
		協働のプロセス	● 1 つ 1 つが現実的で目標がはっきりしている。[14]

[1]（公財）公害地域再生センター（あおぞら財団）／[2]ラムサールセンター／[3]（特活）炭鉱（やま）の記憶推進事業団／[4]（一財）北海道国際交流センター／[5]（一財）白神山地財団／[6]（一社）若狭高浜観光協会／[7]（特活）中部リサイクル運動市民の会／[8]（特活）プロジェクト保津川／[9]（公財）水島地域環境再生財団（みずしま財団）／[10]（特活）瀬戸内里海振興会／[11]うどんまるごと循環コンソーシアム／[12]（特活）土佐の森・救援隊／[13]（特活）グリーンシティ福岡／[14]（一社）小浜温泉エネルギー

【表付録 3-2：協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく
「プロジェクト・マネジメント」／「協働ガバナンス」の提案・改善点】

	提案・改善点	
	「プロジェクト・マネジメント」（事業）	「協働ガバナンス」（協働）
[1] あおぞら財団	● 誰に何を伝えたい？ ● 富山以外の具体的な話があれば聞きたい。 ● 身銭を切る？環境省の事業化？ ● ネットワークのお金の算段は？ ● 人権教育と環境教育の縦割りがある。（解消すると…公害教育の確立？公害問題の解決？） ● “課題は解決していない”というメッセージが伝わっていない ● 海外の公害問題を抱えている地域との連携は視野に入っているのか ● 中国など国外への教育もできる。 ● 公害のネガティブなイメージから現状を伝えない。→余計にネガティブに。 ● ヒアリングシート（項目）や、そこで分かったことをもっと知りたいです。 ● 企業のまきこみをもっとできないか。社員研修とか。 ● 将来的に公害の加害者となりうる対象へのアプローチは？→社員研修・リスク管理として。 ● 来年度以降の継続見込みはどんな感じですか？	● 広がって困ったことは？ ● 幹事団体グループ作りなどのチャレンジは進んでいるか？ ● ネットワークの後、何をめざし、何を実現していくのか不明。 ● ネットワークのコアな目的がステートメントにまとまっているのか不明。 ● 場の唯一性を資料館の間で共通のアジェンダとして明示できてない。 ● 来年に向けて、どう協働するのか。 ● そもそもなぜ協働をするのか？見えない。 ● 政策協働の可能性は探った？ ● 公害教育を進めるための課題整理と関係者の洗い出しは？ ● 外（企業等）に働きかけるためにも内部（ネットワーク）の方向性・考え等を共有・確立すべきではないか。 ● フォーラム以外にもう 1 回。ネットワーク全体があつまる場をつくり、個別ヒアリングに代える。
[2] ラムサールセンター	● 行政にアプローチする際は予算化の前、春か秋に話すのがよい。 ● KR 終了後、継続性が不明確→自治体で予算取り（実施済み地域） ● いかに、教育プログラムとして教育委員会にアプローチする。→ここにリーチするには、自治体と強くコミット！ ● 全地域でファシリ研修ができるか？ ● 担い手づくり重要。→研修と体制を ● 大学生の巻き込みは？→ユースラムサールジャパンを中心に、これから集める。 ● この 3 つのモデルだからできたこと？（上手くいかないところがあっても良かった）。 ● 3 つのモデルは先進的（優良）。他はどうだったのか。→今年はタイプ別に取組んでみた。 ● →もともと上手くいっていないところでやることも必要。 ● 46 湿地へのリーチをどう考えているかが不明。 ● 新しい湿地からの参加が無かった。	● KR プログラム作成に地元の関係者の巻き込みは？ ● 登録湿地の管理の元は環境省。そこへのアプローチ？
[3] 炭鉱の記憶推進事業団	● 産業遺産としての価値を高め、環境と経済の融合を目指してはどうか。 ● アートの活動団体とのネットワークを構築してはどうか。（トリエンナーレの開催等） ● →採択団体（NPO 法人炭鉱の遺産推進事業団）が、札幌市立大学と協力してアートプロジェクト（http://sora-coal-art.info/）を実施。幾春別連合町内会も協力している。 ● この地域の特色をブランドに企業の力を得る。 ● エコツアーや商品の開発をより具体的に進めるための協働ではないか。 ● →炭鉱の記憶推進事業団で旅行業を取得する準備がある。また、協議会でも、地域特産品の開発や、ジオパーク推進に絡んだ地元ガイドの育成等について話題に出た。 ● 若い世代を引き込むシステム（雇用を含む）の構築。 ● 民有地を持つ企業を団体内に巻き込む。	● 地権者の事業者（株式会社ホッコン、住友）によって対応が違う。 ● 体験の場の認定をすすめてはどうか。 ● →打ち合わせの際、情報提供を行った段階。 ● 集まるだけではなく何をだれに伝えるかが大事。そのしくみをつくるためだと思うが… ● ビジョンが利害関係者でどこまで共有されたのかが不明。 ● 環境政策との連動。（環境政策部局へのヒアリングと役割分担、連携協働）
[4] 北海	● 失敗事例を知りたかった→どうフォローしたか？ ● いつでも爆発する火種はある。 ● 取組の発信はどのようにしているか？ ● 英語版を地元大学まかせでは？	● 計画自体どこまで協働のもと作れそうか？ ● 環境基本計画のどの部分を担っている？ ● 全体としてどう動いているのか行政の視点でもう少し可視化するとわかりやすい。

道国際交流センター	● 作ったレシピを観光に使いその利益を地域に共有する仕組みがあるか？ ● レシピでかせいだ利益の共有は考えているのか？（飲み会、つり道具など） ● ユースの取組があるといいのでは？	● 今回の活動は連携でこれから作る計画のためのプラットフォーム作り。 ● 計画を協働で作るようになるような展開。 ● 協働としてどうか？関係者を巻き込めた？ ● 協働の仕組みを使い地域ビジョンへ。 ● 提案書の中身、目標と照らし合わせる。 ● 協働主体の役割分担はできているのか。 ● 中間成果共有←ヒアリング　聞く、伝える。 ● 継続のしくみ→新しく巻き込んだステークホルダーをつないでおく。 ● 新しいステークホルダーを実際に巻き込む次の一手は？ ● 地域の未来を話せる場をつくるべきでは？ ● 漁師、酪農家に問題意識はあったのか？ ● ここだけは共有できているという部分を明確にしては？ ● 自分たちのやれる事でも周りにやってもらうことで巻き込む。 ● 池田さんはプレイヤーではなくプロデューサーに。 ● ファシリテーターを呼んでもっと地域に開いた場を作っては? ● 毎年など定期的に変化を見える化する。
[5]白神山地財団	● 教育プログラムの目的＝交流人口の増加による地域活性化と明確にした方がよいのでは？ ● 世界遺産化することで地域から身近なものではなくなったのでは？ ● 参加者がまだ偏りあり。（小中高、観光、その他市民団体） ● 事業拡大のために行政との関わりを大切にしていくべき。 ● 出来上がったプログラム活用では地域の学校、教育委員会との共同が最大のカギ。 ● ブックレットの配布先と効果は？年配者には理解できたのか？（見られたか） ● 企業でもなくマタギでもない人（学生?子供？）のアプローチが必要？	● 行政とのさらなる協働が今後必要。 ● 今後の広い活動に目を向けて協働者の開拓を！ ● 地域グループとの交流の場を持つこと。 ● 現在ガイドとして活躍しているマタギの方との理解をさらに深めて。 ● そもそも白神山地をどのように守っていくか？協議？できた？ ● マタギの人たちにどう理解してもらうか考えないといけない。
[6]若狭高浜観光協会	● 世界のブルーフラッグのレポートの活用。（国別情報） ● 外圧の活用。（国際的認知度の活用） ● 海のレジャーをターゲットにしているだけでは？ ● 本来の恵みを折り入れなければ実感はわかないのでは。（地引網体験など） ● 環境マネジメント+文化→エコツーリズムとしてブランド化。 ● 地元住民の海に対する意識。ブルーフラッグ取得の意識調査をすべき。 ● ストーリー性を持って発信していく！ ● 地元小学校の子供たちに親しんでもらうプログラム。 ● 若い人たちの活躍に住民を巻き込んで協力して郷土食を売り出すなどのメニューを作る。（食は人をつなぐ） ● 自然学校などで環境教育ネットワークに発信力を高める。 ● 風景楽しむ→商品化。 ● 国際的な誘客のストーリーをより強化する。	● 地元でのブルーフラッグを取ることのメリット共有。 ● 関係者のスキルも UP していかないと活性化にならない。 ● 夢を語り、言える場を大切にすること。すでに会はあるかとは思いますが、さらにということで。
[7]中部リサイクル運動	● もっと目に触れるように。 ● 飲食店との連携のあり方を追求する仕組み ● 消費者へのリスースびんの食品リサイクル価値訴求内容。 ● ビンのリユースを推進する視点からすれば酒造会社 or 飲料会社を増やすべき。 ● イメージとしてリユースとお酒がスムーズに結びつかないので工夫を。 ● ヒアリング調査の戦略的活用。（信頼関係/情報－） ● 環境負荷軽減の明確な数値化。 ● →行政の計画との連動性の可視化。 ● 他の酒蔵（業界）との連携が不明	●

[8]保津川プロジェクト	● アプリというツールは本当に届けたい人に届くためのツールなのかが不明。 ● ごみマップの管理コスト。 ● ゴミ処理　仕組みと費用？ ● 費用負担、作業負担をどう実現させるのか。 ● ごみマップの管理は続くのか？ ● 桂川というネームバリューを生かした啓発。京都のシンボルの川がこんなんであきまへんで、と舞妓はんに叫んでもらうとか。	● コンセプトの明確化。ゴミは捨てさせないことがどんなふうにして上流で食い止めることか。　どちらが重要なのか。 ● ネットワークを継続する仕組みはどこまで実現したか？ ● 流域自治体の連携、協働は今後の活動として注目したい。 ● 上流と下流の役割分担とは何？ ● 排出源の自治体の責任を引き出す。例えばバーベキューゴミはそのバーベキュー施設のある自治体がもっと川に捨てさせない責任があると思います。 ● 取組協定の締結についての見通しは？ ● NPO と市が協働で事務局を運営する際、役割分担など、うまくいったか？ ● 個人ごとになるともっとよい。 ● 下流域の自治体との連携協働は？
[9]みずしま財団	● プログラム開発の財政。 ● 水島コンビナートにある企業　2 社→複数社へ。 ● 大学生の留学生以外へのアプローチはないのか。 ● 北九州市に学べ。 ● 企業をさらに巻き込む必要 ● 難しい相手は？→企業　キーパーソン。 ● 財政的な基盤は→プログラム。 ● アジアー協働学ぶPRシール、大学連携進む。 ● 企業の技術を環境に活かし地域を持続可能に。 ● コンビナート、元気、環境との共生→ひとつのスタイル。 ● 岡山大学が主？→倉敷芸術大学。（留学生とか） ● 他の大学も巻き込みたい。留学生も意味ある？？ ● コンビナートの企業協賛をねらいたい。 ● 町を学ぶプログラム、関係づくり。 ● 大学のメリット→フィールド。 ● 学生→社会・・・社会倫理規範を学ぶ。	● 知って貰うだけでなく、実際の協働した行動が必要だと思う。 ● 岡山市の環境教育学習の計画との連動性の可視化。 ● 地域活性化につながるビジョンへのインプットはどこまでできましたか？ ● 学びを我慢する地域がどうメリットを感じられるか。 ● 地縁組織との連動→商店街・町内会（みらいを考える会） ● 去年からどう進んだ？→理念の共有、方向性。 ● 協働でこころがけること→学びを通じて若い人集める。 ● 大企業のコンセンサスは？→地域貢献。 ● 大企業と地域の関係性を学びでつくれる。 ● 水島新しいコミュニティづくりとかませる。 ● 地域間（内）の温度差。
[10]瀬戸内里海振興会	● 地域の関心が薄れている→どうやってひかれていくのか？ ● 周囲の巻き込みの工夫は？　島、アートに来るかどうかは人による ● 人を連れてくる仕掛けが必要。 ● 活動を継続させる仕組みは？ ● 定期的に島外からくる人確保できれば。 ● 目的（地域振興）と手段（ゴミ拾いによる交流）のつながりの整理。 ● アート→島外からの人→その島を美しくしたい思いの流れが少しわかりにくい。 ● 子供たちを連れてくる。 ● ステークホルダーを増やせれば（島外のファンをつくる？） ● アートの貢献？→人はきている。 ● 島の過疎化、外資に狙われる、社会課題。　働きかけ。	● キーマンがキーマンになっていない。 ● 地域の人がやりたいと思っていることとの結びつきは？ ● 協働はどのようにして進展しましたか？ ● 目的を達成するために必要なリソースを揃えることができてない？ ● 有力者を軸にした協働からそれ以外の層（若・子供・女性など）にいかに広げるかがポイント。
[11]うどんまるごと循環コ	● 残渣を出さない工夫は？（いつまでもコシをキープできるうどんの開発とか） ● そもそもうどんの廃棄量を減らすことをアプローチが必要では。（環境の視点で） ● 小中学校への展開にあたっては「環境教学習」という取組だけでなく「食育」のコンテンツとしても面白い。（すでに取組まれているかも） ● うどん店の増加がなかった。（アンケート止まり） ● 発想の良さが魅力的。 ● うどん残渣→学校給食に回すなど活用できないか。 ● 教育委員会巻き込み？ ● 事業の紹介だけであって人との連携がみえない。→ EPOが	● 産廃業者さんとの関係づくりは少しは見込みがあるか？ ● →市が仲介して声掛けして協力の機運をつくろうとしている。 ● 自治体の強力な巻き込み　EPOのサポートが必要。 ● 産廃業者と行政との関係をもっと明確にして解決策を。 ● 協働はどこまで深化しましたか？ ● 「元：千代田という私企業ビジネス→今：地域の環境学習　県・市→今後：うどん業界の巻き込み　市民参加の動き」に対して、

ンソーシアム	説明している。 ● 廃棄されるうどんの量を削減する取組は？ ● リサイクルの仕組みとしては面白い。がそもそも残渣が出ない様にする何等かの取組はしていないのか？ ● バイオガスから電気にしているがガスをそのまま活用できないだろうか？ ● うどんコンソ＝イノベーション　社会に広がる認識に出来ないか？ ● 新たな波及はあったか？ ● 学生の参画は？	企業は「私企業ビジネス→地域との連携→地域との協働」、NPO は「割りばしに変わるプロジェクト→地域との連携→？（市民参加）」
［12］土佐の森	● 材料の安定供給が不安。 ● 目標はどこまで達成できたか？ ● 土佐の森、土佐の川、土佐の海→流域としての展開。 ● 協力隊員の活用　林業＋α。 ● 担い手が増えた時、需要は確保できたか。	● 目標はどこまで達成できましたか？ ● ひとの創生のための仕組みが見えにくかった。（対象はどうするのかなど）
［13］グリーンシティ	● カーボンオフセットでのPR可、50 万円。 ● 過去と現在の地図を GPS で比較。 ● 企業協賛。 ● 収入源の確保。（ワッペンなど） ● 取組みの持続可能性のためのビジネスプラン。 ● 事務局運営費の獲得。 ● 海山連携。（湿地など） ● ラムサール条約湿地とのリンク。	● 地方環境事務所野生生物課との連携。 ● 行政を巻き込むためのコツ、留意点の可視化→他地域の参考にできるように。 ● 拡大した活動の継続、拡大の見通しは得られましたか？ ● 地元住民との関係づくり。
［14］小浜温泉エネルギー	● アクセス、公共交通機関。 ● 体験プログラムの強化。 ● 食グルメの提案。 ● 組織基盤の強化。 ● 収入源の確保。 ● 多様な財源。 ● 発電事業の波及効果。 ● 乾燥小屋の利用。 ● サウナ。 ● カーボンオフセットの利用。（50 万円） ● 事業化に耐えうる組織の強化。	● 中間支援のための財源確保。

［1］（公財）公害地域再生センター（あおぞら財団）／［2］ラムサールセンター／［3］（特活）炭鉱（やま）の記憶推進事業団／［4］（一財）北海道国際交流センター／［5］（一財）白神山地財団／［6］（一社）若狭高浜観光協会／［7］（特活）中部リサイクル運動市民の会／［8］（特活）プロジェクト保津川／［9］（公財）水島地域環境再生財団（みずしま財団）／［10］（特活）瀬戸内里海振興会／［11］うどんまるごと循環コンソーシアム／［12］（特活）土佐の森・救援隊／［13］（特活）グリーンシティ福岡／［14］（一社）小浜温泉エネルギー